

V. 地域・公共マネジメントプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、2014 年には、「まち・ひと・しごと創生法」が成立し、少子高齢化への対応や東京圏への人口集中の是正を推進することが明示され、2018 年の「改正地域再生法」では、企業の東京からの移転や市町村の商店街活性化、空き店舗活用の支援などが盛り込まれました。

しかし、それでもなお、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2025 年度は、プログラム全体イベント（サマースクール）として、静岡県掛川市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施のうえ、行政や地元の関係者との間で実地見聞と調査を行い、2025 年 12 月 13 日にはオンラインにより掛川市職員の方に向けて最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界や NPO での活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

2. 2025 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP 演習A	FLP 演習B	FLP 演習C	総計	実施形態
1	工藤 裕子	法	3	2	2	7	合併(A・B・C)
2	鳴子 博子	経済	-	1	1	2	合併(B・C)
3	山崎 朗	経済	4	2	4	10	合併(A・B・C)
4	根本 忠宣	商	2	5	2	9	合併(A・B・C)
5	天田 城介	文	5	3	5	13	単独(A・B・C)
6	新原 道信	文	6	9	5	20	単独(A・B・C)
7	川崎 一泰	総合政策	1	3	2	6	合併(A・B・C)
8	小林 勉	総合政策	5	4	1	10	単独(A・B・C)
9	堤 和通	総合政策	-	2	2	4	単独(B・C)
10	佐藤 信行 工藤 潤	法務研究科 法学部	4	-	-	4	単独(A)
合 計			30	31	24	85	

3. プログラムスケジュール

- 5 月 第 1 回部門授業担当者委員会
- 7 月 ガイダンス（一年次生向け）
第 2 回部門授業担当者委員会
- 8 月 学外活動（サマースクール・静岡県掛川市）
- 11 月 2026 年度募集に伴う選考試験
- 12 月 第 3 回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

サマースクール

実施日： 2025年8月18日(月)～8月19日(火)
実施都市： 静岡県掛川市
実施場所： 掛川市役所・他
実施内容： ヒアリング・現地調査・フィールドワーク（掛川市役所ならびに企業・外部団体）

サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実施日： 2025年12月13日(土)13:00～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8304 教室
実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告・他

5. これまでの履修生の主な就職・進学先実績

法務省、総務省、財務省、農林水産省、厚生労働省、国土交通省、文部科学省、内閣府、特許庁、参議院事務局、衆議院事務局、国税庁、環境省、気象庁、原子力規制委員会、人事院、防衛省、東京国税局、地方裁判所、裁判所事務官、家庭裁判所、高等裁判所、警視庁、福島県警察本部、北海道庁、岩手県庁、福島県庁、茨城県庁、栃木県庁、群馬県庁、埼玉県庁、千葉県庁、東京都庁、神奈川県庁、新潟県庁、山梨県庁、長野県庁、岐阜県庁、静岡県庁、三重県庁、京都府庁、千代田区役所、港区役所、墨田区役所、江東区役所、品川区役所、大田区役所、世田谷区役所、渋谷区役所、中野区役所、杉並区役所、北区役所、荒川区役所、板橋区役所、練馬区役所、葛飾区役所、江戸川区役所、逗子市役所、八王子市役所、日立市役所、君津市役所、国立市役所、調布市役所、小平市役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋谷市役所、さいたま市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、秦野市役所、藤沢市役所、宇都宮市役所、韭崎市役所、笛吹市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、大分市役所、大村市役所、特別区人事・厚生事務組合、日本郵政、都市再生機構、中小企業基盤整備機構、日本電気、日本原子力発電、東京電力ホールディングス、四国電力、沖縄電力、日本原燃、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、ゆうちょ銀行、日本政策金融公庫、りそなホールディングス、三井住友銀行、清水銀行、大垣共立銀行、三菱 UFJ 信託銀行、組合中央金庫、多摩信用金庫、横浜信用金庫、西武信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、かんぽ生命保険、明治安田生命保険相互会社、あいおいニッセイ同和損害保険、三井住友海上火災保険、全国市町村職員共済組合連合会、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、住友化学、大日本住友製薬、ヤンマー、ダイキン工業、東京エレクトロン、オカムラ、NISSHA、キャノンマーケティングジャパン、NECソリューションイノベータ、インテリジェンス、東急エージェンシー、電通九州、東急コミュニティー、東日本旅客鉄道（JR 東日本）、日本航空（JAL）、京成電鉄、西日本鉄道、イトーヨーカ堂、セブン・イレブン・ジャパン、東急ストア、日本マクドナルド、大日本印刷、トッパンフォトマスク、KOA、富士ソフト、セガ、三菱電機、山九、デロイトトーマツコンサルティング、アビームコンサルティング、トランス・コスモス、積水ハウス、東京建物、三井不動産レジデンシャル、近鉄不動産、三菱地所、NTT コミュニケーションズ、NTT 都市開発、UR コミュニティ、東日本電信電話（NTT 東日本）、デル・テクノロジーズ（Dell）、デジタルハリウッド、日本生活協同組合連合会、東京都国民健康保険団体連合会、日本放送協会、東京都福祉保健財団、学校法人立教学院、国立大学法人東京大学、東京都公立大学法人、東北大学公共政策大学院、慶應義塾大学法学研究科、学校法人和光学園、東京大学新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、一橋大学大学院、北海道大学大学院、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）、エディンバラ大学大学院など

6. 演習教育活動

(1) 工藤 裕子 (法学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

<授業の概要>

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

<活動内容>

演習Aについては、春学期前半に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ。社会科学の調査方法としては、国内実態調査（静岡県掛川市）を6月21～22日に現地において実施するのにあわせ、事前学習、事後の質疑のやり取りなどを経て、春学期末に政策提言のグループ・プレゼンテーションを実施し、掛川市および関係機関にフィードバックを行った。調査および政策提言のプレゼンに基づく個人レポートは、夏季課題とした。また並行して、サマースクールに向けての事前調査、情報収集と課題の特定、仮説の構築などを実施し、サマースクールの準備を進めた。

秋学期は、サマースクールのヒアリングに基づく調査研究および期末報告会でのプレゼンテーションの準備を行った。秋学期後半は、また、文献調査と座学により海外実態調査の準備を行った。海外実態調査（以下「研修」と表記）については、2026年2月24日～3月8日の日程で、イタリア、エミリア＝ロマーニャ州にて実施した。昨年度はオンライン開催となってしまうため、現地開催を強行したが、A生の現地参加者2名、オンラインでのB生およびC生の参加が一部講演について3名という小規模開催となり、受け入れ先に多大な負担を強いることになった。参加学生についても金銭的な負担のみならず、各人の準備および研修中の作業等の大変さは過去にないものとなり、最低催行人数を設定する必要性を突きつけた。また、研修途中に勃発した中東情勢の急変に伴い、当初予約していたドーハ経由のカタール航空便が欠航となり、帰京の代替便の確保ならびにそれに伴う旅程延長の間の行動計画の作成、宿泊先の確保などの危機管理に迫られ、学生にとっては想定外の試練が訪れた。

演習Bについては、春学期は前年度末、春休み中に実施したイタリア研修の報告書作成の作業および各人の関心テーマを踏まえた卒論（修了論文）テーマの選定を中心に個人研究発表と討論を進めた。春学期の後半は、また、夏季休業中から秋学期はじめにかけて実施する演習Bによる国内実態調査の準備を行った。演習A時に実施した海外実態調査を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習Bとして調査するテーマの決定、訪問先の選定、訪問先機関との調整などを進め、夏季休業中から秋学期前半にかけて国内実態調査を実施した。

秋学期後半には、この研究成果をゼミで発表したうえ、卒論（修了論文）のテーマを選定し、個人による研究発表を行った。そのうえで、A生時の海外実態調査の報告、国内実態調査の報告、各人の研究テーマについてのレポートを含むB生の一年間の活動記録をまとめた報告書を作成した。

演習Cについては、春学期にそれぞれの卒論（修了論文）のテーマを最終決定したうえ、

執筆計画を作成、夏休みから秋学期にかけて論文を執筆、完成させたうえ、卒業（修了）論文集を編集した。今年度は、廃校の利活用による地域活性化、および高度な知識等を持つ外国人人材による地域活性化をテーマにした卒業（修了）論文が完成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2025年6月21日（土）～2025年6月22日（日）

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所・他

実施内容：掛川市の市政概要、生涯学習都市、公共交通、防災をめぐる諸政策、お茶を中心とした農業政策（世界農業遺産 静岡の茶草場農法について）・産業政策、観光と交流をめぐる諸政策、空き家対策・移住政策についてのヒアリングと調査

成果：掛川市の産業・まちづくり、観光振興、お茶を中心とした農業振興、災害対策・危機管理、交通政策、移住・定住政策とシティ・プロモーション、企業の役割などを学んだ他、市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業等へのヒアリングを通して、調査とヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。プレゼンテーションはゼミ時に学生各自の個人発表として実施、さらに夏季休業中の課題として個人でレポートを作成した。

対象演習：A

実施日：2025年6月21日（土）～2025年6月22日（日）

講演者：長濱 裕作 氏（合同会社 Brass Entertainment Company・the port kakegawa）

演題：空き家対策、移住政策（移住促進）

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内および掛川市役所

実施内容：U ターン起業家である長濱氏より、自身の起業家としての事業活動全般に加え、掛川市の中心市街地において空き店舗をリノベーションし、コワーキング・スペース、宿泊施設、インキュベーション施設として運営している the port kakegawa の活動等について紹介いただいた。また、起業に際しての発想やビジネスプラン、ライフサイクルとの関係などについてもお話しいただいた。

成果：講演に関心を持った学生たちがその後、長濱氏と連絡を取り、見学調査終了後に the port kakegawa を訪れて直接インタビューを実施した他、サマースクール時には宿泊施設としても利用した。講演の内容を調査研究、報告に活用したのみならず、紹介いただいた施設の活用に至ったケースはこれまでに少なく、有意義な講演であったといえる。

対象演習：A

実施日：2025年6月21日（土）～2025年6月22日（日）

講演者：山崎 善久 氏（ローカルライフスタイル研究会・合同会社互産互生機構）

演題：掛川におけるスローライフ活動とローカルライフスタイル研究会の役割

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内および掛川市役所

実施内容：掛川市のこれまでのスローライフ活動の経緯および歴史、行政との関係、ローカルライフスタイル研究会が果たしてきた役割、『学び旅』をめぐる最近の活動などについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。

成果：掛川市のスローライフ活動について、特に市民の視点を学ぶことができたほか、公私協働の具体的な活動やプロジェクトの内容を学ぶことで、行政と市民との協

力関係の可能性を知ることができた。掛川市においてなぜ市民と行政の協働がこれまでさかんなのか、その要因と現状を知ることができた。

対象演習：A

実施日：2025年6月21日(土)～2025年6月22日(日)

講演者：佐藤 雄一 氏（ローカルライフスタイル研究会・合同会社互産互生機構）

演 題：互産互消という考え方と互産互生機構の活動：交流人口の創出に関連して

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内および掛川市役所

実施内容：一般に知られている「地産地消」にはさまざまな限界がある、という認識から出発した「互産互消」の哲学と、それを複数地域において相互の経済の活性化の起爆剤として活用するというビジネスの視点から始まった互産互生機構の活動について、現在、全国的に、また政府においても注目され始めつつある二地域居住の推進および交流人口の創出の可能性を含めて解説していただいた。

成 果：掛川市と北海道や沖縄の諸地域がなぜ「互産互消」をするのか、それがそれぞれの地域経済にもたらしたインパクト、そして、それによって生まれた人的な交流や新しいライフスタイルを学ぶことができた。「これっしかどころ」をはじめとする市内複数の売店で実際に関連商品が売られているところを確認することで、経済的なインパクトについての理解も深まった。

対象演習：B

実施日：2025年8月19日(火)～2025年8月22日(金)

実施都市：岐阜県岐阜市

実施場所：世界農業遺産「清流長良川の鮎」推進協議会・他

実施内容：卒業（修了）論文のテーマとして「世界農業遺産」に着目したB生が、世界と日本の諸事例の相違点や類似点を調査した結果、日本において、地域の諸アクターが関わって推進されている先進事例に焦点を当て、その一つとして「清流長良川の鮎」推進協議会取材した。同協議会が主催するイベントに参加して体験するとともに、関係者へのインタビューを実施した。

成 果：成功事例として知られている事例ではあるが、生の声を取材することにより、さまざまな課題やコメントを収集することができた。また、現地を訪れ、実際に見て体験することにより、具体的なイメージを取得することができた。卒業（修了）論文の執筆に向けて有意義な経験となった。

対象演習：B

実施日：2025年8月27日(水)～2025年8月28日(木)

実施都市：宮崎県小林市

実施場所：小林市役所・他

実施内容：卒業（修了）論文のテーマとして「地方自治体による移住政策の推進：特に広報戦略を中心として」を仮題として設定したB生が、日本の地方自治体による移住促進のための広報戦略としてベスト・プラクティスの一つとされる小林市について、市役所および市役所とともに広報ビデオの作成等に関わった学校関係者等取材した。政策、戦略についてのみならず、市民の活動としての側面について、関係者へのインタビューを実施した。

成 果：受賞歴なども多く、名実ともに移住政策に関する行政広報のベスト・プラクティスとされる小林市の事例を調査することを通じ、これらが単なる広報戦略ではなく、地元市民、特に子供たちのシビックプライドを醸成する運動になっていたことなど、重要な視点に気付くことができた。卒業（修了）論文の執筆に向けて有意義な経験となった。

対象演習：A

実施日：2026年2月24日(火)～2026年3月8日(日)

実施都市：イタリア エミリア＝ロマーニャ州（チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市、サンタ・ソフィア市、ガレアータ市、プレダッピオ市、フォルリ市、ソリアーノ・アル・ルビコーネ市、フォルリンポポリ市、チェルヴィア市、ベルティノーロ市）、ローマ市、ミラノ市

実施場所：ファッジョーリ農場およびエミリア＝ロマーニャ州フォルリ＝チェゼーナ県の上記地方自治体

実施内容：EU のプロジェクト等でもよく知られる、アグリツーリズム農場であるファッジョーリ農場を拠点に、小規模自治体および私企業、研究機関、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体（市長および担当評議員）、地域振興に関係する組合、ボランティア団体、企業の担当者のレクチャー、インタビューを実施し、質疑応答を通じて理解を深めた。また、伝統産業（工芸、食品など）の体験学習を行い、伝統の伝承やそのビジネスとしての可能性などを学んだ。

成果：海外の地方自治体の首長等の主要ステークホルダーにインタビューを行い、充実した質疑応答を経て本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。EU におけるアグリツーリズムのパイオニアであるファウスト・ファッジョーリ氏とその継承者で女性経営者であるフランチェスカ・ファッジョーリ氏のレクチャーのみならず、各市長、担当評議員、起業家、組合組織やボランティア団体の関係者など、さまざまなステークホルダーにインタビューすることができた。

A 生は、各自の卒論（修了論文）テーマに向けてさまざまなインプットを得ることができ、またそれぞれ、いろいろな感慨や学びがあった。B 生は、オンライン実施であった前年度の調査において見落としていた、あるいは聞き逃していたディテールに気付くことができ、有意義であった。C 生にとっては復習になったのみならず、新たな発見も多かった。

対象演習：A・B・C

実施日：2026年3月1日(日)

講演者：Fausto Faggioli 氏（Fattorie Faggioli 創始者）

演題：EU およびイタリアにおける農業・農村政策の歴史・現在・未来：アグリツーリズム法を中心として

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市

実施施設：ファッジョーリ農場 ボルゴ・バジーノ

実施内容：EU のモデル・ケースとされるファッジョーリ農場を 1982 年に創業、イタリアのアグリツーリズム法の制定にも大きく貢献、以来、EU のさまざまな農業振興・農村活性化等のプロジェクト・マネージャとして活躍する一方、近年ではボローニャ大学、ヴェネツィア大学、ボッコーニ商科大学などで後進の指導を中心に活動されている講演者より、イタリアのアグリツーリズムについて、歴史やこれまでの主要プロジェクトを振り返りつつ、コロナ禍で多くの産業が疲弊する中、むしろ活気を呈したアグリツーリズムおよび農業・農村の可能性に関してお話をいただいた。また、ケース・ヒストリーとしてファッジョーリ農場の成り立ちや現状についても詳しく解説していただいた。

成果：A 生については、今後の調査研究にあたっての、問題意識を深めることに役立った。B 生については前年度のオンライン調査の復習の意義があった。C 生についても、現地調査時には体系的なお話を聞くことができなかったため、貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2026年2月28日(土)・3月1日(日)

講演者：Francesca Faggioli 氏 (Faggioli Experience 代表)

演題：ファッジョーリ農場が提案する持続可能な農泊とトキ消費とその一例：伝統レシピの再発見と再現

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市

実施施設：ファッジョーリ農場 ボルゴ・バジーノ

実施内容：ファッジョーリ農場の創始者を継いで同農場の共同代表として活動する傍ら、同農場で受け入れる研修の企画、コーディネート、デジタル・サポートを実施する Faggioli Experience をパンデミック下に立ち上げ、その代表を務める講演者のこれまでの活動について、特にパンデミック中に始めたデジタル配信活動やその後のトキ消費に焦点を当てた観光の作り方を中心にお話しいただいた。また、最近のエモ消費やモチベーション消費について、女性起業家としての活動、地元の伝統レシピの再発見と再現についてお話しいただいた。

成果：情報発信および広報活動の重要性、デジタル・ツールの活用の方法、そしてコト消費・トキ消費・エモ消費の具体的なあり方、体験学習の重要性などを学ぶ機会となった。

A 生においては、国内については学習してきたコト消費・トキ消費について海外の事情を知る機会となり、B 生においては、昨年度のオンライン研修時にはまだ含まれていなかったエモ消費やモチベーション消費についての見識を深めることができた。C 生については、海外実態調査実施時には含まれていなかった、女性起業家の視点を学ぶことができた。

(2) 鳴子 博子 (経済学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

本物のジェンダー平等を実現するために何が必要か
—政治・法律・経済の視点からの探究—

<授業の概要>

世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップ指数における日本の低迷、とりわけ政治と経済の分野で女性が劣位に立たされ、世界から大きく取り残されている事実をまず確認します。女男や多様な性の人々は、いかにして自分らしく働き、生きてゆくことができるのでしょうか。

【B生】

輪読での学びを踏まえて、二年目の具体的な研究テーマ、フィールドを選んで、実態調査を準備、実行します。二年目の活動の締めくくりとして年次報告書を作成します。

【C生】

輪読での学びを踏まえて、本年度の具体的な研究テーマ、フィールドを選んで、実態調査を準備、実行します。最終学年として共同研究の総まとめとなる修了論文(報告書)を完成させます。

<活動内容>

鳴子ゼミは少人数ゼミであることから、B生・C生の合同授業とし、B生は原則、多摩キャンパスの教室にて対面で、C生は自宅からオンライン参加のハイブリッド型でゼミを実施した。2025年度の研究テーマは、話し合いの結果、昨年度、試行錯誤を経てサマースクール後に変更した研究テーマ「津山市における父親の育児参加推進の街づくり」を継承・発展させて「父親の家事育児参加の推進」とすることに決まった。本年度もB生・C生が協力して本テーマを追究することとなった。

ところで、鳴子ゼミは、本年度の静岡県掛川市で実施されたサマースクールにメンバーのやむを得ない理由により、参加することが叶わなかった。そのため、掛川市に代わる実態調査地として栃木県佐野市を選び、2025年10月に現地調査を実施した。佐野市を選んだ主な理由は、佐野市が、昨年度のサマースクール地であった岡山県津山市と人口規模が似通っていること、また同市が子育て支援に力を入れていることなどであった。佐野市役所こども家庭センターおよび「NPO 団体 SAN0-no-WA さののわ」にヒアリングを実施した。

2025年12月の期末成果報告会での発表を経て、「期末成果報告書」を取りまとめた。鳴子ゼミの「報告書」の特徴は、男性の育児参加を促進するための現状改善策について「各家庭」「自治体」「企業」の三主体に分けて提示したところにある。詳細については、「報告書」を参照いただければ幸いである。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2025年10月27日(月)

実施都市：栃木県佐野市

実施場所：佐野市役所こども家庭センター・他

実施内容：佐野市役所こども家庭センターでは、センター設立の目的、3コースに分かれたママパパ学級の男女比、父親が相談しやすい工夫、父親の育児参加促進のための今後の取り組み、鳴子ゼミ作成の家事育児分担表への意見などを尋ねた。父親が始めた子育てサポートグループである「NPO 団体 SAN0-no-WA さののわ」に対しては、活動の目的、団体の取り組み、活動のきっかけ、父親のイベント参加率、父親たちの反応、男性参加を促す工夫、成功したイベントとその理由、行政との連

携など多岐にわたる質問に答えていただいた。

成果：こども家庭センター、SANO-no-WA へのヒアリングにより、「育休」の周知の重要性、なかでも企業への働きかけの必要性を認識することができた。さらに「コミュニティづくりときっかけづくり」の必要性を理解するとともに、できないと責めることが父親の家事育児への参加の意識を低下させること、「それぞれの家庭内の文化や生活の違いがあること」を踏まえた施策を考えるべきことに気づくことができた。

〈期末成果報告書の目次〉

1章	はじめに
2章	現状分析
2-1	テーマ設定
2-2	家庭内での家事育児の現状
2-2	家庭内での家事育児の課題
2-3	2章まとめ
3章	調査結果
3-1	仮説
3-2	ヒアリング先
3-3	ヒアリング結果
3-3-1	こども家庭センターへのヒアリング
3-3-2	NPO 団体 SANO-no-WA へのヒアリング
3-4	ヒアリングまとめ
3-5	3章のまとめ
4章	調査結果の考察
4-1	ヒアリング結果の考察と課題
4-2	4章まとめ
5章	昨年との比較
5-1	家事育児分担表の作成
5-2	男性サポートグループの設立
5-3	5章まとめ
6章	課題整理と仮説設定
7章	現状改善策
7-1	各家庭を対象とした改善策設定の根拠
7-2	各家庭に向けた改善策
7-3	自治体を対象とした改善策設定の根拠
7-4	自治体に向けた改善策
7-5	企業に向けた改善策
7-6	7章まとめ
8章	総括
	参考文献

(3) 山崎 朗(経済学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

地域創生のデザインと地域イノベーション

<授業の概要>

2008 年から日本の人口は減少しています。2008 年以前から人口減少している地域も少なくありません。東京都もまもなく人口減少に転じると予想されているなかで、地域をいかにデザインしていくのかが問われています。本ゼミでは、その観点から、地域イノベーション政策、産業クラスター、地域のグローバル化、地域のプレミアム化を取り上げます。

テキスト、参考文献をてがかりにしながら、地域のグローバル化について各自、関心のあるテーマを設定し、自主的な研究を行います。また、全員で実態調査に行きます。2025 年度は北海道上川郡東川町で調査を実施しました。

ゼミ内における研究成果は、懸賞論文やプレゼン大会、ビジネスコンテストなどへの応募という形で社会に公開していきます。

これまでに「創立 130 周年中央大学の未来～私の提言～最優秀学生賞」、「第 59 回みずほ学術振興財団懸賞論文佳作」、「第 1 回地球の歩き方総合研究所懸賞論文佳作」、「第 61 回みずほ学術振興財団懸賞論文三等<一等・二等は該当なし>」、「学術・文化・産業ネットワーク多摩主催：2023 年度まちづくり・ものづくり部門 学術賞奨励賞およびビジネス優秀賞」、「クミアイ化学学生懸賞論文特別賞」などの成果が出ています。2025 年「クミアイ化学学生懸賞論文」および「建設コンサルタンツ協会学生懸賞論文」に応募しており、現在その結果待ちの状況です。

<活動内容>

山崎ゼミは、山崎朗編著『地域創生の新しいデザイン』（中央経済社、2025 年）を輪読しつつ、全国各地の先進事例を調査し、その結果をさまざまな懸賞論文に応募している。今年度は上記の 2 つの懸賞論文に応募した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2025 年 10 月 28 日(火)～2025 年 10 月 30 日(木)

実施都市：北海道上川郡

実施場所：東川町役場・他

実施内容：空港に近い臨空都市の成長戦略

成 果：東川町は、北海道では札幌市周辺の通勤圏やニセコ地区を除く地域としては珍しい人口増加地域である。その背景には、農業、とくに豊富な水資源を活用した稲作の大規模農業があり、東川町には耕作放棄地が存在していない。平均耕作面積も 12ha を超え、農家収入が 600 万円以上あるため、後継者問題も深刻化していない。

ただし、農家の規模拡大にともなって、農家人口は減少を続けており、農業の持続的発展と地域の持続的発展の間には矛盾があることがわかった。農業の労働生産性向上は、農家数、農業就業人口を減少させ、地域の人口減少を加速させるが、農業産出額や生産農業所得を増大させる。この対立をいかに地域政策として調査させるのかが、地域のデザインとしても求められる。

それは、地域おこし協力隊の導入（一時全国でもっとも多かった）、フォルケフォイスコーレの実施（大人向けの社会人教育機関）、全国初の公立日本語学校の設立、隈研吾事務所（北海道の拠点）の誘致と隈研吾氏によるサテライトオフィスの建設、旭川家具と称されている東川町にある家具産業の振興と家具を使用した街のブランド化、全国向けの写真甲子園の開催、関係人口の構築、支援企業との連携

など多様なサービス業にかかわる事業が展開されており、それらが、地域の雇用と人口の増加に寄与していることが判明した。

(4) 根本 忠宣 (商学部・教授)

F L P 演習 A・B・C

<テーマ>

- 【A 生】 地域活性化の源泉を探る
- 【B 生】 地方における定住促進の可能性
- 【C 生】 地域に関する研究論文の作成

<授業の概要>

【A 生】

定住地としての地域、働く場としての地域、商業地としての地域、学びの場としての地域、観光地としての地域など評価すべき軸を明確にしたうえで、地域活性化の源泉が何かを特定するために、関連論文の輪読を実施した。

【B 生】

ゼミ交流会（関西大学商学部横山ゼミ、北海道大学経営学部相原ゼミ、大阪公立大学商学部林ゼミ、西南学院大学経済学部西田ゼミが参加）で報告するための論文作成のための先行研究の輪読とともに、都心からの地方への移住・定住の動機や要因あるいは政策支援の有効性についての検証を行った。

【C 生】

昨年のゼミ交流会で報告した逗子市の地域愛着の研究をさらに発展させるという方向で、NPO へのインタビューや市民向けアンケートを実践した。授業のなかで、その結果の報告とともに、適宜中間報告を実施し、A 生ならびに B 生に対して、フィールドの実践方法や論文の作成方法について情報共有を行った。

<活動内容>

それぞれの学年の研究について関連文献を輪読するとともに、研究成果の報告を適宜行うことで、相互に共有した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実 施 日：2025 年 5 月 13 日(火)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：公益社団法人ふるさと回帰・移住交流推進機構

実施内容：インタビュー

成 果：移住者の動向や特徴、移住先の選定、満足度や課題についての話を聞くことができ、研究の対象の選定に問題がないかを確認できた。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 6 月 14 日(土)

実施都市：北海道札幌市

実施場所：北海道大学

実施内容：中間報告会

成 果：他大学の研究の進捗状況を知ることで、レベル感や修正すべき方向性を確認することができた。また、研究だけではなく、他大学との交流を深めることもできた。

対象演習：C

実 施 日：2025 年 7 月 15 日(火)

実施都市：神奈川県逗子市

実施場所：逗子アートネットワーク（ZAN）

実施内容：インタビュー

成 果：逗子のNP0の実態を知るだけでなく、人と人のネットワークがどのように形成されているのか、その実相を可視化できた。

対象演習：C

実 施 日：2025 年 10 月 4 日（土）

実施都市：神奈川県逗子市

実施場所：逗子の各地

実施内容：逗子アートフェスティバルへの参加

成 果：アートフェスの実行委員のメンバーとして、アートフェスティバルの開催にあたってのイベントの支援を行った。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 11 月 11 日（火）

実施都市：静岡県三島市

実施場所：三島市役所

実施内容：インタビュー

成 果：移住支援の具体的な内容の説明を受けるとともに、その利用状況や成果についての実態を把握することができた。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 12 月 14 日（日）

実施都市：大阪府大阪市

実施場所：関西大学 梅田キャンパス

実施内容：最終報告会

成 果：参加する他大学の教員から一定の評価を受けるとともに、今後の発展的な研究のためのアドバイスをもらうことができた。

(5) 天田 城介 (文学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことを可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所としてどのように地域があるのか、あるいは当該地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとは生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習 A では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつ、前期にサマースクールでの調査設計とフィールドワークの準備を行い、サマースクールではフィールドワークの実施・分析・考察・プレゼンテーションを遂行する。後期では、サマースクールのフィールドワークの追加調査を実施すると同時に、データ分析・データ解釈作業を行ったのち、期末成果報告会でのプレゼンテーション、最終報告書の作成を行う。また、可能であれば、東京圏郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）へのインテンシヴなフィールドワークを実施する。これらの調査を通じて徹底的に分析・考究していくことになる。

演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

<活動内容>

前期には、2025 年 8 月 18 日（月）～19 日（火）に実施の「中央大学 FLP 地域・公共マネジメントプログラム 2025 年度 サマースクール in 掛川市」の準備のため、静岡県掛川市に関する先行研究をレビューしつつ、掛川市がまとめた各種行政資料や報告書などを渉猟した。こうした文献レビューと同時に、研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などを行い、リサーチデザインを確定していった。とりわけ、今年度のサマースクール調査の「問い」を「掛川市における外国にルーツを持つ人々はどのような困難を抱えているのか。支援の担い手は現在どのような支援を行っており、またどのような支援上の困難を抱えているのか」をテーマとし、当該テーマを「外国にルーツをもつ当事者の抱える困難」と「支援者が抱え込んでいる支援上の困難」の 2 つの視点から解説するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとで、より緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。幸いにも、掛川市役所や関係機関のご協力により順調に調査を設計・計画・実施することができた。実際、初日の朝から動けるように 8 月 17 日（日）に前泊し、8 月 18 日（月）～19 日（火）に静岡県掛川市にて調査を行った。具体的には、1 日目に、掛川市教育委員会と掛川日本語学校をそれぞれ訪問しインタビュー調査を実施したのち、2 日目に掛川市役所企画政策課ダイバーシティ戦略係と掛川国際交流センターとの合同でのインタビュー調査を実施することができた。それらのデータを緻密に分析したのち、丁寧に考察を深め、具体的な政策提言をまとめた。今回はそうした調査結果を 2 日目の調査報告会にて報告することはなかったが、インタビューデータを持ち帰り、夏期休業期間や後期授業ではそれらのデータをもとに幾重にも慎重に分析を重ねていった。

上記調査の結果として、【1】掛川市における外国にルーツを持つ人々は、文化の違いによるトラブル、言語・学習上の問題、差別や偏見、経済・生活上の問題といった困難を抱えていること、【2】そのような当事者たちを支援するために、支援の担い手は、多言語対応の相談窓口を設置していること、手厚い日本語指導や日本語教室にて言語教育支援を行っていること、各種のイベントや交流会などを通じてコミュニケーションを図っていること、経済・生活上の支援も図っていることが指摘されること、【3】しかしながら、支援上の課題として

は、長期的・継続的な資源を確保すること、行政間、団体間の連携を強化していくこと、アウトリーチ強化を含めた情報へのアクセシビリティを保障すること、切れ目のない支援を展開すること、外国にルーツを持つ人々が受け身に回ってしまうことが挙げられること、【4】そのためにこそ、外国にルーツをもつ人々が「地域社会の共同構成者」へと「主体的アクター」に変える仕組みが不可欠であり、長期滞在を前提とした制度設計へと転換することが求められることを提示した。

上記の結果を12月13日（土）の期末成果報告会で報告したところ、幸いにも参加してくださった方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末はFLP報告書の作成を行うと同時に、2026年度より本格的に実施する首都圏での調査プロジェクトのフィールドワークを検討した。具体的には、首都圏調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

全体としては、自らが設計・計画したフィールドワークやインタビューを中心とする調査を実際に実施することができ、大変充実したものとなった。また、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2026年度の本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

2025年8月18日（月）～19日（火）に「中央大学FLP 地域・公共マネジメントプログラム 2025年度 サマースクール in 掛川市」を実施した。なお、8月18日（月）は午前中から調査を実施するため、8月17日（日）は移動日として調査の準備にあたった。

FLP演習B

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことを可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所としてどのような地域があるのか、その地域におけるどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能となったり、困難となっているのかを探求する。

演習B、演習Cでは、一年間を通じて各グループで首都圏にてインテンシブなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏の2回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

<活動内容>

全体としては、2025年度も自らが設計・計画したフィールドワークやインタビューを中心とする調査を実際に実施することができ、大変充実したものとなった。具体的には、定期的な首都圏でのインタビュー調査やフィールドワークを実施すると同時に、2025年8月20日（水）～8月22日（金）において大阪府大阪市での夏季フィールドワークも実施することができた。そのため、ゼミ生はインタビューを中心に大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した1年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「高齢者班」「子ども班」「障害者班」の3グループに分けて、それぞれのグループごとに研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は2025年6月～2026年1月にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野において支援活動を行っているNPO法人や当事者会（ピアグループ含む）などに対して実施した。各グループは概ね2～3つのNPO法人や当事者会（ピアグループ含む）等に1回90～120分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

今年度の夏季フィールドワークは、2025年8月20日（水）～8月22日（金）において大阪府大阪市にて実施した。

1日目の8月20日（水）は、釜ヶ崎のフィールドワークを実施したのち、NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）中庭にて、「日本最大ドヤ街」と称される日雇い労働者の街である釜ヶ崎（あいりん地区）において、不安定な労働や貧困を余儀なくされてきたと同時に、今日では高齢化により生活保護などを受けるなどして生活する人びとに日常の営みについて直接お聞きすることができたことで、釜ヶ崎の先進的な支援を展開してきたNPO法人釜ヶ崎支援機構の理事長である山田實氏にいかなる当事者支援を行っているのかについて講演していただいた。午後には、釜ヶ崎に住む人びととともに「哲学の部屋」を実践してきた西川勝氏（元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授）の講演を聞いた。

2日目の8月21日（木）は猪飼野のフィールドワークをすると同時に、北鶴橋振興会館2F会議室にて、自らも生野で生まれ育ち、当事者として在日コリアンの教育運動に深く関わりながら研究を展開している梁陽日氏（同志社大学嘱託講師）に在日コリアンの教育運動の現代史について講演をしていただいた。

午後には、北鶴橋振興会館2F会議室にて、午前同様、梁陽日氏（同志社大学嘱託講師）に今度は在日コリアン3世として経験してきた生活史をお聞きした。

3日目の8月22日（金）は、事前学習と首都圏でフィールドワークを積み重ねてきた各グループに分かれて、「高齢者班」がNPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西に、「子ども班」がNPO法人CLACKに、「障害者班」が大学院進学のために関西に転居し、新たな自立生活を送っている当事者にインタビュー調査を実施した。

こうした夏季フィールドワークで収集したデータを分析し、年度末にフィールドワーク成

果報告書としてまとめた。

大阪市において、地域に根差して当事者やその当事者を支える取り組みをしてきた人びとやNPO法人などを訪ね、直接お話をお聞きすることは学生たちにとって大いなる学びとなった。このようなフィールドワークならびに講演から、学生たちは、当事者はいかなる経験をしており、支援者はどのような困難を抱えているのかについて考えることはこれ以上のない学びになったと確信するものである。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は当事者をどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。こうしたインタビューやフィールドワークで収集したデータを分析し、後期にはその分析と考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。また、後期後半からはFLP報告書の作成を行った。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にフィールドワークやインタビューに取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2026年度に向けて更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2025年8月20日(水)～8月22日(金)

実施都市：大阪府大阪市

実施場所：NPO法人こえとことばとこころの部屋、北鶴橋振興会館・他

実施内容：「日本最大ドヤ街」と称される日雇い労働者の街である釜ヶ崎と、在日コリアンが集住する猪飼野でのフィールドワークを実施した。また、釜ヶ崎にて不安定な仕事や貧困を余儀なくされる当事者やNPO法人釜ヶ崎支援機構のスタッフにインタビューすると同時に、自らも猪飼野に住み、在日コリアンの教育運動にコミットしてきた梁陽日氏にインタビュー調査を実施した。

成 果：これらのフィールドワークは、当事者や地域の人たちが抱え込まざるをえないリアリティを理解することになり、FLPの学生たちが当事者のリアリティを知るきわめて貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月20日(水)

講演者：山田 實 氏（特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構 理事長）

演 題：釜ヶ崎における日雇い労働者・生活困窮者への支援実践とその課題

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

実施内容：山田實氏（特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構 理事長）は、1976年に結成した釜ヶ崎日雇労働組合の副委員長・委員長を経て、日雇労働にも従事しながら現場闘争や賃金闘争を牽引した人物である。また、1992年以降の不況期に反失業闘争を仕切りながら、1999年にNPO法人釜ヶ崎支援機構の設立に尽力し、翌年より代表を務めてきた。誰よりも釜ヶ崎を理解し、先進的な活動を行ってきた山田氏に当事者の方々のお話をさせていただく機会をサポートしていただきながら、講演を行っていただいた。

成 果：山田氏の講演はFLPの学生たちにとって当事者のリアリティを知るきわめて貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月20日(水)

講演者：西川 勝 氏（元大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター特任教授）

演 題：釜ヶ崎で自ら生きる／釜ヶ崎で他者とともに生きる

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

実施内容：元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授であり、臨床哲学を専門とする西川勝氏による「釜ヶ崎で生きること」と題する講演を行った。西川氏は、自ら釜ヶ崎に深く関わりながら、生活困窮者とともに「哲学カフェ」を開催し、ともに志向してきた人物であり、当事者を研究することの意味について報告していただいた。

成 果：西川勝氏の講演はFLPの学生たちにとって当事者を研究することの意味を思考する貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月21日(木)

講演者：梁 陽日 氏（同志社大学 嘱託講師）

演 題：在日コリアン教育運動の現代史——戦後大阪の公立学校を中心に

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：北鶴橋振興会館

実施内容：長きにわたって在日コリアンの民族教育に深くコミットしたのち、自らの経験をもとに立命館大学大学院先端総合学術研究科の博士論文において「在日コリアン教育運動の現代史——戦後大阪の公立学校を中心に」をまとめた梁陽日氏に、戦後日本社会における在日コリアンの教育運動の意味とその今日的課題について講演していただいた。

成 果：梁陽日氏の講演はFLPの学生たちにとって当事者を研究することの意味を思考する貴重な機会になったと同時に、在日コリアンの当事者運動や地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月21日(木)

講演者：梁 陽日 氏（同志社大学 嘱託講師）

演 題：在日コリアンとして生きる

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：北鶴橋振興会館

実施内容：大阪市生野区生まれの在日コリアン3世であり、自らも過酷な差別や排除を経験した当事者である梁陽日氏に自らの経験を、そして自らの子ども世代の当事者たちの経験がどのように変容してきているのかについて自らの経験を中心に話をしていただいた。加えて、自らの子世代である在日コリアン4世・5世は、同じ世代であっても、またきょうだいであっても、きわめて多様な経験をしていることについて講演していただいた。

成 果：上記のように、在日としてのアイデンティティも全く一様ではなく、多層的なグラデーションで構成されていること、このようなきわめて多様で複雑な在日コリアン3世や4世・5世としてのアイデンティティを語っていただいたことで、在日コリアン当事者たちのきわめて複雑な現実を理解する契機になった。

FLP演習C

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことを可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所としてどのように地域があるのか、その地域におけるどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能となったり、困難となっているのかを探求する。

演習 B、演習 C では、一年間を通じて各グループで首都圏にてインテンシブなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏の 2 回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

<活動内容>

全体としては、2025 年度も自らが設計・計画したフィールドワークやインタビューを中心とする調査を実際に実施することができ、大変充実したものとなった。具体的には、定期的な首都圏でのインタビュー調査やフィールドワークを実施すると同時に、2025 年 8 月 20 日（水）～8 月 22 日（金）において大阪府大阪市での夏季フィールドワークも実施することができた。そのため、ゼミ生はインタビューを中心に大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した 1 年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「高齢者班」「子ども班」「障害者班」の 3 グループに分けて、それぞれのグループごとに研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は 2025 年 6 月～2026 年 1 月にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野において支援活動を行っている NPO 法人や当事者会（ピアグループ含む）などに対して実施した。各グループは概ね 2～3 つの NPO 法人や当事者会（ピアグループ含む）等に 1 回 90～120 分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

今年度の夏季フィールドワークは、2025 年 8 月 20 日（水）～8 月 22 日（金）において大阪府大阪市にて実施した。

1 日目の 8 月 20 日（水）は、釜ヶ崎のフィールドワークを実施したのち、NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）中庭にて、「日本最大ドヤ街」と称される日雇い労働者の街である釜ヶ崎（あいりん地区）において、不安定な労働や貧困を余儀なくされてきたと同時に、今日では高齢化により生活保護などを受けるなどして生活する人びとに日常の営みについて直接お聞きすることができた。釜ヶ崎の先進的な支援を展開してきた NPO 法人釜ヶ崎支援機構の理事長である山田實氏にいかなる当事者支援を行っているのかについて講演していただいた。午後には、釜ヶ崎に住む人びととともに「哲学の部屋」を実践してきた西川勝氏（元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授）の講演を聞いた。

2 日目の 8 月 21 日（木）は猪飼野のフィールドワークをすると同時に、北鶴橋振興会館 2F 会議室にて、自らも生野で生まれ育ち、当事者として在日コリアンの教育運動に深く関わりながら研究を展開している梁陽日氏（同志社大学嘱託講師）に在日コリアンの教育運動の現代史について講演をしていただいた。

午後には、北鶴橋振興会館 2F 会議室にて、午前同様、梁陽日氏（同志社大学嘱託講師）に今度は在日コリアン 3 世として経験してきた生活史をお聞きした。

3 日目の 8 月 22 日（金）は、事前学習と首都圏でフィールドワークを積み重ねてきた各グループに分かれて、「高齢者班」が NPO 法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西に、「子ども班」が NPO 法人 CLACK に、「障害者班」が大学院進学のために関西に転居し、新たな自立生活を送っている当事者にインタビュー調査を実施した。

こうした夏季フィールドワークで収集したデータを分析し、年度末にフィールドワーク成

果報告書としてまとめた。

大阪市において地域に根差して当事者やその当事者を支える取り組みをしてきた人びとや NPO 法人などを訪ね、直接お話をお聞きすることは学生たちにとって大いなる学びとなった。このようなフィールドワークならびに講演から学生たちは当事者はいかなる経験をしており、支援者はどのような困難を抱えているのかについて考えることはこれ以上のない学びになったと確信するものである。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は当事者をどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。こうしたインタビューやフィールドワークで収集したデータを分析し、後期にはその分析と考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。また、後期後半からは FLP 報告書の作成を行った。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にフィールドワークやインタビューに取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2026 年度に向けて更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2025 年 8 月 20 日(水)～8 月 22 日(金)

実施都市：大阪府大阪市

実施場所：NPO 法人こえとことばとこころの部屋、北鶴橋振興会館・他

実施内容：「日本最大ドヤ街」と称される日雇い労働者の街である釜ヶ崎と、在日コリアンが集住する猪飼野でのフィールドワークを実施した。また、釜ヶ崎にて不安定な仕事や貧困を余儀なくされる当事者や NPO 法人釜ヶ崎支援機構のスタッフにインタビューすると同時に、自らも猪飼野に住み、在日コリアンの教育運動にコミットしてきた梁陽日氏にインタビュー調査を実施した。

成 果：これらのフィールドワークは、当事者や地域の人たちが抱え込まざるをえないリアリティを理解することになり、FLP の学生たちが当事者のリアリティを知るきわめて貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025 年 8 月 20 日(水)

講演者：山田 實 氏（特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構 理事長）

演 題：釜ヶ崎における日雇い労働者・生活困窮者への支援実践とその課題

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

実施内容：山田實氏（特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構 理事長）は、1976 年に結成した釜ヶ崎日雇労働組合の副委員長・委員長を経て、日雇労働にも従事しながら現場闘争や賃金闘争を牽引した人物である。また、1992 年以降の不況期に反失業闘争を仕切りながら、1999 年に NPO 法人釜ヶ崎支援機構の設立に尽力し、翌年より代表を務めてきた。誰よりも釜ヶ崎を理解し、先進的な活動を行ってきた山田氏に当事者の方々のお話をさせていただく機会をサポートしていただきながら、講演を行っていただいた。

成 果：山田氏の講演は FLP の学生たちにとって当事者のリアリティを知るきわめて貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月20日(水)

講演者：西川 勝 氏（元大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター特任教授）

演 題：釜ヶ崎で自ら生きる／釜ヶ崎で他者とともに生きる

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

実施内容：元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授であり、臨床哲学を専門とする西川勝氏による「釜ヶ崎で生きること」と題する講演を行った。西川氏は、自ら釜ヶ崎に深く関わりながら、生活困窮者とともに「哲学カフェ」を開催し、ともに志向してきた人物であり、当事者を研究することの意味について報告していただいた。

成 果：西川勝氏の講演はFLPの学生たちにとって当事者を研究することの意味を思考する貴重な機会になったと同時に、地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月21日(木)

講演者：梁 陽日 氏（同志社大学 嘱託講師）

演 題：在日コリアン教育運動の現代史——戦後大阪の公立学校を中心に

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：北鶴橋振興会館

実施内容：長きにわたって在日コリアンの民族教育に深くコミットしたのち、自らの経験をもとに立命館大学大学院先端総合学術研究科の博士論文において「在日コリアン教育運動の現代史——戦後大阪の公立学校を中心に」をまとめた梁陽日氏に、戦後日本社会における在日コリアンの教育運動の意味とその今日的課題について講演していただいた。

成 果：梁陽日氏の講演はFLPの学生たちにとって当事者を研究することの意味を思考する貴重な機会になったと同時に、在日コリアンの当事者運動や地域実践の可能性と課題を深く理解する契機になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年8月21日(木)

講演者：梁 陽日 氏（同志社大学 嘱託講師）

演 題：在日コリアンとして生きる

実施都市：大阪府大阪市

実施施設：北鶴橋振興会館

実施内容：大阪市生野区生まれの在日コリアン3世であり、自らも過酷な差別や排除を経験した当事者である梁陽日氏に自らの経験を、そして自らの子ども世代の当事者たちの経験がどのように変容してきているのかについて自らの経験を中心に話をしていただいた。加えて、自らの子世代である在日コリアン4世・5世は、同じ世代であっても、またきょうだいであっても、きわめて多様な経験をしていることについて講演していただいた。

成 果：上記のように、在日としてのアイデンティティも全く一様ではなく、多層的なグラデーションで構成されていること、このようなきわめて多様で複雑な在日コリアン3世や4世・5世としてのアイデンティティを語っていただいたことで、在日コリアン当事者たちのきわめて複雑な現実を理解する契機になった。

(6) 新原 道信 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいました。2年次には、前期から夏休みの実態調査にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験しました。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行して行きました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community Based Research (CBR)）”と“療法的でリフレクシヴな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research (T&R)）”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジルなどの大学とも知見を共有していきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学

部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

A 生は、「若者に向けたシティプロモーション」というテーマに基づき、掛川市における観光およびシティプロモーションの現状について調査を実施しました。政策提言を行うにあたり、観光・地域づくり、産業・農業、移住といった多岐にわたる分野に対する理解を深める必要があると考え、これらの分野に関連する施設や関係者の方々にヒアリング調査を行いました。サマースクールおよびそれに伴う事前調査・フィールドワークを通じて得た知見や実地調査から得た気づきを踏まえ、期末成果報告を行い、その後、下記のタイトルと構成による期末成果報告書を取りまとめました。

『かえってきたくなるまち 掛川』

1. はじめに
2. 市の概要
3. 現状分析
 - 3-1 地域資源と魅力
 - 3-2 観光交流客数と認知度
 - 3-3 事前調査後のテーマ
4. サマースクールについて
 - 4-1 各訪問先のヒアリングの結果
 - (1) 掛川市役所 マーケティング課
 - (2) 掛川市役所 交通政策課
 - (3) 掛川市移住コーディネーター 芳川翠様
 - (4) かけがわ街づくり株式会社
 - (5) 掛川観光協会・ビジターセンター「旅のスイッチ」
 - (6) 体験型古民家宿 旅ノ舎
 - (7) JA 掛川市
 - (8) かけがわランド・バンク
 - 4-2 サマースクールのまとめ
5. 政策提言
 - 5-1 政策提言① 「かけがわサウナ」
 - 5-2 政策提言② 「かけがわ散歩マップ」
 - 5-3 SNS を活用した広報
6. まとめ
7. 謝辞
8. 参考文献

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実施日：2025年8月18日(月)～2025年8月19日(火)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所マーケティング課・交通政策課、移住コーディネーター、かけがわ街づくり株式会社、掛川観光協会、体験型古民家宿・旅ノ舎、JA掛川市、かけがわランド・バンク・他

実施内容：テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、「生存の場としての地域・コミュニティ」の条件についての考察を深めた。

FLP演習B

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいました。2年次には、前期から夏休みの実態調査にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験しました。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community Based Research (CBR)）”と“療法的でリフレクシヴな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research (T&R)）”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジルなどの大学とも知見を共有していきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。フィー

ルドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

B生は、ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」も含め、各自の問題関心にもとづき複数の調査研究チームに分かれて、立川・砂川、高円寺、石黒、たまプラーザ、鶴見、豊島区などをフィールドとして、「地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワーク」を実施しました。その成果は、各自および班単位の期末成果報告書としてとりまとめられました。

「地域子供会キャンプにおける相互行為と自己形成」
「高円寺でのフィールドワークと石黒の暮らしについて」
「活発な地域交流拠点の運営方法について」
「歴史資料と歴史資料館における地域コミュニティのあり方」
「移住者コミュニティが地域社会において果たしてきた役割と世代継承について」
「外国にルーツを持つ子どもたちの現状と課題」
「居場所づくり施設における「居場所」とはなにか」

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2025年8月18日(月)～2025年8月19日(火)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所マーケティング課・交通政策課、移住コーディネーター、かけがわ街づくり株式会社、掛川観光協会、体験型古民家宿・旅ノ舎、JA掛川市、かけがわランド・バンク・他

実施内容：テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、「生存の場としての地域・コミュニティ」の条件についての考察を深めた。

対象演習：B・C

実施日：2025年9月10日(水)～2025年9月12日(金)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：大室山、城ヶ崎文化資料館、東海館、ビジターセンター、八幡野漁港、伊東市街・他

実施内容：新原学部・院ゼミ、国際協力ゼミとの合同で、テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、「生存の場としての地域・コミュニティ」の条件についての考察を深めた。

FLP演習C

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいました。2年次には、前期から夏休みの実態調査にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験しました。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行して行きました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community Based Research (CBR)）”と“療法的でリフレクシヴな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research (T&R)）”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジルなどの大学とも知見を共有していきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。フィー

ルドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

C 生は、サマースクールを実施する A 生へのアドバイス、個々人の研究テーマに取り組む B 生へのアドバイスに加えて、先輩より引き継いだ「多摩ランタンフェスティバル」への参加を中心に、京王電鉄株式会社と独立行政法人都市再生機構の共催のアイデアピッチ、多摩八角堂に継続的にかかわる「ゆるたま隊」への参加など、様々な形で地域と関わる活動を行いました。

多摩ランタンフェスティバルは、多摩ニュータウンの豊ヶ丘・貝取エリアで開催されるイベントで、企業や自治体、地域住民が一体となって企画・実施されています。FLP 地域・公共プログラム新原ゼミは、日本総合住生活株式会社(JS)と協力し、関わらせていただけてきました。今年度は、C 生が主体となって B 生と共同で企画を行い、当日には A 生や文学部社会学専攻、FLP 国際協力プログラムのゼミ生もブースの運営に協力してくれました。

このランタンフェスティバルへの参加は地域の方々と実際に関わることができる機会の 1 つとなっています。新原ゼミの活動全体のテーマともいえる「地域に寄りそい、ひとにここを寄せるフィールドワーク」の実践の場としてこれからも関わりを続けていくことができればよいと考えています。

そのなかで、「単に『関わること』と『関わり続けること』のあいだには、大きな隔たりがあるのではないか」という問題意識を抱くようになり、「地域に寄りそい、ひとにここを寄せるフィールドワーク」の集大成として、下記の構成による期末成果報告書「2025 年度 C 生期末成果報告書」をまとめました。

第 1 章:多摩ランタンフェスティバル

概要、企画意図、実践報告、駄菓子を媒介としたコミュニケーション、地域に根付く大学としてのアイデンティティなど

第 2 章:学生による多摩エリアのまちづくりに関するアイデアピッチ

稲城市の基本情報と現状、提案内容、考察と今後の展望など

第 3 章:ゆるたま隊での活動と地域との関わり

参加背景と多摩八角堂との出会い、運営体制、学生が地域に関わることの意義など
終章

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習: A・B・C

実施日: 2025 年 8 月 18 日(月)~2025 年 8 月 19 日(火)

実施都市: 静岡県掛川市

実施場所: 掛川市役所マーケティング課・交通政策課、移住コーディネーター、かけがわ街づくり株式会社、掛川観光協会、体験型古民家宿・旅ノ舎、JA 掛川市、かけがわランド・バンク・他

実施内容: テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成 果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、「生存の場としての地域・コミュニティ」の条件についての考察を深めた。

対象演習：B・C

実 施 日：2025 年 9 月 10 日(水)～2025 年 9 月 12 日(金)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：大室山、城ヶ崎文化資料館、東海館、ビジターセンター、八幡野漁港、伊東市街・他

実施内容：新原学部・院ゼミ、国際協力ゼミとの合同で、テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成 果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、「生存の場としての地域・コミュニティ」の条件についての考察を深めた。

(7) 川崎 一泰 (総合政策学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

地域計画のための分析手法を学ぶ

<授業の概要>

この科目では地域を設定し、問題発見をし、課題解決のための政策提言を行うことを最終目標とする。そのためのデータ収集、データ処理、分析などの座学にはじまり、現地調査などのフィールドワークや行政へのヒアリング調査など多角的に学習する。

<活動内容>

川崎ゼミは、掛川市におけるサマースクールに参加するため、文献調査からはじめ、データ分析等を通じて、地域課題の発見を試みた。関連する街づくりの事例を調査し、併せて制度研究も行い、アイデアの取りまとめを行った。春学期は総合計画を参考にしつつ、地域課題と政策のポイントを把握した。また、都市計画や地区計画などの手法を学びつつ、民間投資による街並み形成や商業的価値についてディスカッションした。夏休みのサマースクールで現地を視察しつつ、ヒアリング等を通じて、地域課題を把握するとともに、地域の資源の確認も行った。秋学期はメンバーでディスカッションを重ね、具体的な政策提案のための絞り込みを行った。

また、長野県茅野市から委託研究費を受託し、八王子市の学生と茅野市民の交流を促す企画を、市役所や関係団体とのディスカッションにより、3月に市に報告した。

さらに、昨年度のサマースクールでお世話になった岡山県津山市から若い人たちに魅力的なまちづくりとは何かを探る依頼を受け、現地調査などを実施し、政策提言を行ってきたところである。

なお、学生たちの具体的な成果はそれぞれの報告書、HP等に掲載されているので、そちらを参照されたい。

以下、今年度実施した実態調査の概要である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2025年8月4日(月)

実施都市：長野県松本市

実施場所：松本市景観まちづくり実施地域

実施内容：松本城の城下町を中心に、景観を制御する地域の実態と旧家のリノベーションを実施した店舗に訪問し、雰囲気把握した。

成果：掛川市、津山市などの城下町のまちづくりの参考事例となるとともに、リノベーションの財政効果なども把握できた。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年8月5日(火)

実施都市：長野県茅野市

実施場所：茅野市役所、公立諏訪東京理科大学

実施内容：市役所にて今年度の研究内容を打ち合わせた。諏訪東京理科大学にて、学生同士での地域の課題や、昨年、政策提言したことに関する意見交換を行った。

成果：政策提言の実装に向けて、研究内容の精査を行った。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年8月18日(月)～8月20日(水)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所・他

実施内容：市役所への表敬訪問に加え、民間の観光施設や駅周辺の散策などで地域課題を洗い出した。

成 果：現場の状況を把握した。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2025 年 9 月 9 日(火)～9 月 12 日(金)

実施都市：岡山県津山市

実施場所：津山市役所・他

実施内容：市役所担当課職員、津山市商工会議所、津山商店街連合会などでヒアリング調査を実施した。この他、市長と面談し、市の課題などの共有を行った。

成 果：事前に調査した課題と解決に向けたアイデアの実行可能性の確認や課題の実態を把握した。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2026 年 2 月 18 日(水)～2 月 19 日(木)

実施都市：長野県茅野市

実施場所：茅野市役所・他

実施内容：今年度の委託調査として、実証実験を実施し、仕組みの課題検証と行動検証を実施した。

成 果：実証実験を実施した結果、一定の課題と成果があった。なお、この実証実験について、地元紙の長野日報から取材を受け、記事として掲載された。

(8) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結びつけられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

FLP 小林ゼミ演習 A では、①掛川市に向けた政策提言、②J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポートを行った。

まず、①「掛川市に向けた政策提言」では、8月に訪れた静岡県掛川市において、どのような現状か、何が課題かを掛川市役所へのヒアリング調査や現地でのフィールドワークによって明らかにし、そこで得た情報から「観光振興」をテーマに、経済活動の活性化を促す政策提言を行った。

次に、②「J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート」では、J リーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミが 12 年間にわたって実施してきた共同プロジェクトであり、ホーム戦の際にブース企画を行った。プロジェクトの内容は、秋田市のジャーナル作成、福+T シャツ作成、秋田に因んだ工芸品を活かした参加型企画等である。演習 A では、それらの運営サポートを行った。秋田の皆様の毎日に、「スポーツを通じてちょっとした福をプラスしたい」という想いのもと、「元気な街、秋田」の構築を目指してこのような企画の実施に至った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2025 年 8 月 22 日(金)～2025 年 8 月 24 日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：「出羽和紙を利用したしおりの製作体験」の補助を行った。

成 果：緊張した雰囲気はあったものの、ブラウブリッツ秋田サポーターをはじめとする来場者の方々と、出羽和紙を使ったしおりの製作体験を通じてコミュニケーションをとることができた。また、夏休み中ということもあり、子供連れの来場者も多く、多くの世代の方々との交流が深まり、秋田の魅力を再発見してもらうきっかけを創出できた。

対象演習：A・B

実施日：2025 年 9 月 13 日(土)～2025 年 9 月 15 日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：「出羽和紙のお守り製作体験」の補助を行った。

成 果：出羽和紙を使用したお守り製作体験を実施し、A 生は特にブース運営とジャーナ

ル、メッセージカードの配布を担当した。当日は子供連れの家族層の来訪が多く、出羽和紙に親しみながら、オリジナルのお守り製作を楽しむ様子が見られた。和紙が風で飛ばされやすく苦戦する様子もあったが工夫して行うことができた。

対象演習：A・B

実施日：2025年9月27日(土)～2025年9月29日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：「秋田杉を使った絵馬作成体験」の補助を行った。

成果：実際に地元の方やアウェイサポーターの方、クラブスタッフの方と関わり、地域の方々やサッカーファンの空気感や試合運営の流れ等を知ることができ、来年度のプロジェクトに繋がる大変貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月4日(土)～2025年10月5日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：「イタヤ細工製作体験」の補助を行った。

成果：福たす day 第4回目では、秋田の伝統工芸品であるイタヤ細工のタオル留め作り体験が行われた。A生は特にイタヤ細工製作ブース運営とアウェイサポーターヘジャナル、メッセージカードの配布を担当した。当日は家族連れの来場者が多くブースに訪れ秋田市民の方々と交流ができた。イタヤ細工は大人でも難しい作業があり子供は苦戦していたが、職人の方々の協力により楽しく完成させられていた。最後はブラウブリッツ秋田スタッフの方々と撤去作業を行った。全体を通して、スポーツが持つ力が、競技のみならず、地域社会や伝統文化にまで波及することを現場で感じることができた。

対象演習：A・B

実施日：2025年10月25日(土)～2025年10月26日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ブース・展示の実施、無料観戦チケットのお渡しや、インタビュー調査の補助を行った。

成果：これまでの福たすプロジェクトの活動を振り返りながら、アウェイ・ホーム両サポーターの方々と交流できた。サポーターの方々から寄せられた秋田の魅力に関する多角的な意見は、秋田の強みを再確認する機会となり、今後の活動において重要な示唆を得ることができた。

対象演習：A

実施日：2026年2月21日(土)～2026年2月22日(日)

実施都市：静岡県賀茂郡

実施場所：河津町立河津小学校

実施内容：静岡県賀茂郡河津町にて開催されたNPO法人あおぞらビレッジによるイベントの場において、「桜のアートづくり」「コーン当てミニサッカー」を行った。

成果：今回のイベントから、子供たちは地域を元気にする力を持っていると感じた。また、イベント参加者同士のコミュニケーションがコミュニティ構築に繋がり地域のネットワークを強化すると感じた。子供たちを対象とした企画を通して、ルールの難易度などを参加者の反応から確認することができた。来年度実施予定の企画に対して、課題を認識することができた。

FLP演習B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結びつけられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

FLP 小林ゼミ演習Bは、Jリーグクラブとの共同プロジェクトである「福+プロジェクト」の企画運営を行った。「福+プロジェクト」の企画として以下のような活動を行った。

1. おもてなし企画

ウェルカムメッセージと伝統工芸品ふれあい体験を実施した。ウェルカムメッセージではホームサポーターの直筆メッセージをアウェイサポーターにお渡しし、秋田の皆様の温かさをお伝えすることを目的とした。伝統工芸品ふれあい体験では、出羽和紙、秋田杉、イタヤ細工を題材とし、関係人口の増大を目的とした。そして、これらを通して、アウェイサポーターが秋田で過ごす時間を特別なものとし、来年度以降の再来訪を促すことを目標とした。

ウェルカムメッセージでは、アウェイサポーターのXの投稿から、再来訪の意欲の創出と秋田への愛着醸成のきっかけづくりという効果を確認できた。伝統工芸品ふれあい体験では、アンケートから、交流人口拡大のきっかけ創出と地元の魅力再発見という効果を確認できた。

2. 秋田共創ワークショップ

県内の観光関連事業者計12社18名の方をお招きし、アウェイツーリズムをテーマに議論を行った。周遊観光を促進する仕組みや施策の共創と秋田の将来を考える基盤の構築を目的とし、様々な業種の企業や行政など、垣根を超えた共創の場を提供した。

事業者間共創の場の提供、地域の魅力・課題の再認識「アウェイツーリズム」についての知見共有を通して、連携基盤の構築に寄与することができた。

3. キックオフ！キミのミライ！

秋田県内の中高生やその保護者を対象に、進路やキャリアに関する講演イベントを行った。県外で学ぶ意義を伝えつつ、秋田との新たな関わりの創出、秋田で働く・活躍するイメージの具体化、県外で学び、秋田へ還元するという主体性の形成を目的とした。そして、また定住人口へと戻ってきてもらうという人口環流を最終的な目標とした。

参加者の中には、本企画をきっかけに、初めてブラウブリッツ秋田の試合を観戦してくださった方がいらっしやり、その後、「企画への参加を通じて、皆さんのように秋田の活性化に貢献したいと強く感じました」というメールをいただいた。若者と秋田との新たな関係を創出でき、秋田で活躍する未来の人口環流の一步としてのこの企画の機能を実感できた。

4. 無料観戦チケット付き宿泊プラン

秋田県内のホテルと連携し、1泊2日の観戦チケットが付いた宿泊プランを提供した。また、対象試合では、参加者も含めたアウェイ観戦に関するインタビューを行った。アウェイツーリズムへの直接的なアプローチと、アウェイ遠征に関する観光データの取得を目的とした。宿泊プランの利用は3組、アウェイ調査実施は約100組にのぼった。

宿泊プランの利用者の中には「プランが観戦動機のきっかけになった」という声があり、観戦動機の創出という成果が得られた。また、アウェイ調査実施では、観光自体が主目的ではないが、タイミングが合えば観光をしたいライト観光者の需要を確認することができた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2025年6月29日(日)～2025年7月4日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：プロジェクト実施にあたり、関係機関に対して挨拶およびスポンサーシップ広報活動を行った（主に中央大学学生会秋田支部の方々）。

成果：関係機関に対し昨年の御礼、および今年度のプロジェクトについての説明をしたのち、プロジェクトへの協賛を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2025年7月7日(月)～2025年7月9日(水)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：株式会社ブラウブリッツ秋田スタッフの方々に対し、今年度のプロジェクトに関する説明を行った。

成果：プロジェクト案に対し、スポーツビジネスの現場で活躍される方々の、リアルなフィードバックをいただくことができた。また、説明や質疑応答を通じ、プロジェクト実施に向けた連携基盤を構築することができた。

対象演習：B

実施日：2025年7月20日(日)～2025年7月26日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：ブラウブリッツ秋田のファン感謝祭において、おもてなし企画にて配布予定のメッセージカードの作成を選手・ファン・サポーターの方々からお手伝いいただいた。加えて、別日に選手からは企画広報のために使用するSNS投稿の作成にもご協力いただいた。また、企画実施に向け、関係機関へ協力をお願いをした。

成果：ファン感謝祭では、約280枚のメッセージカードを集めることができ、ブラウブリッツ秋田が人々の生活を彩る存在であることを肌で感じた。また、アスリートの息遣いや視点、姿勢から日々己と向き合い、目の前の一分、一秒を大切にすることの重要性を緊張感とともに感じるすることができた。そして、企画実施に向けたお願いをした関係機関からは企画趣旨へのご賛同、実施に向けた協力表明を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2025年7月23日(水)～2025年7月25日(金)

実施都市：秋田県仙北市

実施場所：株式会社川村自動車工業・他

実施内容：プロジェクト実施に向けたスポンサーシップ広報活動を行った。

成 果：プロジェクトへの協賛を得ることができた。また、企業様からの応援の言葉によりプロジェクトへの覚悟や責任感が強まった。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 7 月 26 日(土)～2025 年 7 月 27 日(日)

実施都市：静岡県賀茂郡

実施場所：河津町立河津小学校

実施内容：NP0 法人あおぞらビレッジが主催するあおぞらキャンプに参加し、キャンプに参加した幼稚園生から中学生に向けて、レクリエーションを試行した。

成 果：幼稚園生や中学生に楽しんでもらうにはどのようなレクリエーションを実施すべきか、対象者に合わせた企画立案を経験することができた。また、希望に合わせてその場で臨機応変に対応する柔軟性を養うことができた。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 7 月 28 日(月)～2025 年 8 月 2 日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：秋田県内の交通・観光事業者計 5 社へ訪問し、「秋田共創ワークショップ」への企画協力を依頼した。

成 果：交通・観光事業者 3 社より、「秋田共創ワークショップ」参加への前向きなご意向をいただくことができた。また、ヒアリングを通じて、秋田県の観光分野に対しての課題認識をご教示いただき、企画改善へとつながった。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 8 月 7 日(木)～2025 年 8 月 10 日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：一般社団法人 ONE FOR AKITA・他

実施内容：秋田県内の交通・観光事業者計 4 社へ訪問し、「秋田共創ワークショップ」への企画協力を依頼した。

成 果：交通事業者 1 社より、「秋田共創ワークショップ」参加への前向きなご意向をいただくことができた。また、ヒアリングを通じて、秋田県の観光分野に対しての課題認識をご教示いただいただけでなく、新たな協力依頼先をご紹介いただいた。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 8 月 8 日(金)～2025 年 8 月 10 日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市立山王中学校・他

実施内容：「新スタジアム構想と若者のシビックプライドに関する研究」のため、プレ調査を行った。山王中学校の生徒 12 名にアンケート調査を行い、30 名分の回答を回収した。

成 果：秋田市に住む中学生の地域や新スタジアム構想に対する意識傾向を把握することができた。プレ調査で得られた具体的な意見や視点を集約し、10 月に実施予定の本調査（全校生徒対象）における設問設計および選択肢に反映させた。

対象演習：A・B

実 施 日：2025 年 8 月 21 日(木)～2025 年 8 月 26 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：ブラウブリッツ秋田のホームゲームにて、「おもてなし企画」を実施した。
成 果：「おもてなし企画」参加者には、秋田の伝統的な出羽和紙を使用したしおり製作体験を通して、秋田に対する新たな気づきを提供し、秋田での体験を特別なものと感じていただくことができた。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 8 月 23 日(土)～2025 年 8 月 25 日(月)

実施都市：長崎県長崎市

実施場所：PEACE STADIUM Connected by SoftBank・他

実施内容：「新スタジアム構想と若者のシビックプライドに関する研究」の先行事例を調査するため、スポーツによる街づくりで注目を集める長崎スタジアムシティでインタビュー調査と参与観察を行った。また、施設の広報担当者に案内してもらい、施設に込められた想いや機能について知見を得た。

成 果：スタジアム周辺に、ホテルや商業施設が併設されている長崎スタジアムシティでは、日常と非日常が交差しており、試合日問わず地域住民と観光客で賑わう場所となっていることを確認した。また、施設訪問者に対して行ったインタビュー調査から、「施設が出来たことで生活の質が向上した、子供にとって誇れる場所になった」という声があり、新施設がシビックプライドの醸成に寄与することが示唆された。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 8 月 27 日(水)～2025 年 8 月 28 日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市立山王中学校・他

実施内容：10 月に実施する進路講演イベント「キックオフ！キミのミライ！」に関する広報活動のため、秋田市や横手市に所在する中学校や高校計 13 校にチラシを配布、郵送した。

成 果：教育現場との連携により、これまで接点のなかった層へ企画の認知を広げ、生徒が自身のキャリアを考える契機と、イベント本番への集客基盤を構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2025 年 9 月 11 日(木)～2025 年 9 月 17 日(水)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：プロジェクトへご協賛いただいた方々に対し、お礼の挨拶と返礼品のお渡しを行った。

成 果：実践を通してソーシャルスキルを身につけるとともに、ご協賛いただいた方々との関係をより強固にすることができた。

対象演習：A・B

実 施 日：2025 年 9 月 13 日(土)～2025 年 9 月 15 日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ブラウブリッツ秋田のホームゲームにて、「おもてなし企画」の実施と「福たすジャーナル」の配布を行った。

成 果：「おもてなし企画」参加者には、秋田の伝統的な出羽和紙を使用したお守り製作体験を通して、秋田に対する新たな気づきを提供し、秋田での体験を特別なものと感じていただくことができた。また、前回と実施位置を変更することで、より多

くの愛媛サポーターへ秋田の魅力を届けることができた。

対象演習：B

実施日：2025年9月17日(水)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市文化創造館

実施内容：県内の観光関連事業者を招いた「秋田共創ワークショップ」を実施した。

成果：「秋田共創ワークショップ」と題し、ブラウブリッツ秋田の岩瀬社長や株式会社PlaruのCEOである大崎雄也氏をお招きし、「アウェイツーリズム」の意義や観光DXの活用について講演を行った後、県内の観光関連事業者の方々とともに、ホームゲームに訪れるアウェイサポーターを対象とした受入体制の課題抽出や秋田県の魅力再確認に向けた議論を行い、スポーツを通じた地域活性化について話し合いを深めた。今後も引き続き、事業者の方々と連携して、「アウェイツーリズム」について考える基盤構築を行うことができた。

対象演習：A・B

実施日：2025年9月27日(土)～2025年9月29日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：ブラウブリッツ秋田のホームゲームにて、秋田プライウッド様ご協力のもと「おもてなし企画」の実施、「福たすジャーナル」の配布を行った。

成果：試合日の福たすブースにて、秋田杉で作られた絵馬の作成を会場の方々に体験していただいた。全258枚のうち約50枚はアウェイサポーターの方々に体験していただき、ホームサポーターとアウェイサポーターの交流のきっかけをつくることができただけでなく、秋田杉の絵馬に関連したSNS投稿も多数確認できた。これにより、関係人口創出のきっかけづくりや、地元の魅力の再発見に寄与することができた。

対象演習：B

実施日：2025年10月2日(木)～2025年10月5日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：イオンモール秋田にて第1回「キックオフ！キミのミライ！」を実施した。

成果：進学を控える中高生やその保護者の方々に、県外で学ぶ意義を伝えつつ、秋田で活躍される方々のお話やその魅力を届けることで、将来的な人口環流創出の一步目とすることができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月3日(金)～2025年10月5日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：郷土の魅力を高める企画を実施した。

成果：仙北市役所のご担当者様や、職人様など、外部組織との関係を構築し、企画の実施形式や予算をすり合わせることで企画の実現を果たすことができた。当日は、アウェイサポーター1名、ホームサポーター30名にご参加いただき、「角館への興味が深まりました」「(イタヤ細工を)初めて知った」等の言葉をいただいた。関係人口創出のきっかけづくりや、地元の魅力の再発見に寄与することができた。

対象演習：B

実施日：2025年10月17日(金)～2025年10月18日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田県生涯学習センター

実施内容：第2回「キックオフ！キミのミライ！」を実施した。

成果：第2回は「スポーツ×キャリア」をテーマに講演イベントを行い、スポーツでのキャリアに関心を持つ参加者に、元サッカー選手やブラウブリッツ秋田フロントスタッフの方々のお話を届けることができた。参加者からは「地元にJリーグがあるという幸せに気づくことができた」という声も寄せられ、ブラウブリッツ秋田の社会的価値向上にも微力ながら寄与することができた。

対象演習：A・B

実施日：2025年10月25日(土)～2025年10月26日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ジェフユナイテッド市原・千葉戦にてブース・展示の実施、無料観戦チケットのお渡しやインタビュー調査を行った。

成果：活動内容・目的を直接周知するとともに、ホーム・アウェイ両サポーターとの接点を構築することができた。加えて、ブース内でホームサポーター向けのワークショップを実施することにより、サポーター目線からの観光課題・魅力を再発見できた。また、「無料観戦チケット付き宿泊プラン」により、アウェイサポーターの観戦動機の創出をすることに成功し、アンケート調査では宿泊・来訪動機の創出に成功。観光ルートや消費行動等の二軸のデータを取得し、秋田県の観光振興施策に活用可能な基礎データを集めることができた。

対象演習：B

実施日：2025年11月9日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：いわきFC戦にてブース・展示の実施、無料観戦チケットのお渡しやインタビュー調査を行った。

成果：前試合同様、我々の今年度の活動に興味をもってくださる方と直接お話をする機会を設けることができた。前回の調査結果に基づき設問を改善したことで、観光動機や宿泊意向についてより精度の高い回答を得られた。継続的な調査により、来訪回数や日帰り・宿泊別による消費意識の差を比較分析するための定量データを収集できた。

対象演習：B

実施日：2025年11月22日(土)～2025年11月23日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：ベガルタ仙台戦にてブース・展示の実施、インタビュー調査を行った。

成果：前2試合同様に、我々の今年度の活動に興味をもってくださる方と直接お話をする機会を設けられた。加えて、ホーム・アウェイ両サポーターを対象としたワークショップを実施し、互いの地域目線での魅力を再発見できた。本試合では、従来の観光・消費行動の調査とは異なり、サポーターの価値観やサッカーへの関わり方に焦点を当てたインタビューを実施し、約50組から「感情的動機」等の質的データを収集した。あわせて旅行計画アプリ「Plaru」に関する調査も行い、スポーツ観戦を起点としたデジタル観光支援ツールの発展可能性を確認

できた。

対象演習：B

実施日：2025年12月22日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：協働大町ビル

実施内容：福+プロジェクトにご支援・ご協力いただいた関係者の方々に対して、プロジェクト全体を通じた報告会を実施し、今年度の活動を総括した。

成果：報告会の準備、実施を通して、改めて活動の整理や振り返りをすることができた。また、関係者らに対し、来年度以降の連携についてもご協力のお願いをすることができた。

対象演習：B・C

実施日：2026年1月16日(金)～2026年1月25日(日)

実施都市：オークランド（ニュージーランド）

実施場所：Eden Park・他

実施内容：オセアニア地域で初めて創設される、OFC プロリーグへ参加するバヌアツ代表チーム（バヌアツユナイテッドFC）をはじめとした、国際的なスポーツ組織に対する現地視察と実態調査。

成果：OFC プロリーグの開幕およびバヌアツ代表チーム（バヌアツユナイテッドFC）の試合視察、そして関係者へのヒアリングを通じ、リーグ創設初期における運営上の課題（財政体制や情報発信体制、クラブごとのスケジュール管理）を具体的に把握した。一方、移民の多いオークランドでは、自国のクラブを応援すること自体がコミュニティの誇りや結束を生み、競技・勝敗を超えた社会的価値を創出している実態を確認した。これにより、スポーツが多文化共生や地域社会に果たす役割について実践的な示唆を得た。

FLP演習C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結びつけられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミ演習Cでは、演習A・Bで展開されるJリーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポートを行った。Jリーグクラブとの連携プロジェクトは、ブラウブリッツ秋田と本ゼミが12年間にわたり実施してきた共同プロジェクトである。現地秋田を訪問し、演習Bを中心に企画立案された複数のコンテンツに対して、準備段階から実施当日の運営に至るまでの補助や進行援助などを通じて、演習Bの活動への協力支援活動を行った。

昨年度、プロジェクト11年目において主体的に活動した経験を踏まえ、企画運営上の留意点や現地関係者との連携方法に関する知見を共有しながら支援を行うことで、今年度のプロジェクト推進に尽力した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2025年7月26日(土)～2025年7月27日(日)

実施都市：静岡県賀茂郡

実施場所：河津町立河津小学校

実施内容：NP0 法人あおぞらビレッジによって、静岡県賀茂郡河津町にて開催された、あおぞらキャンプの場において、自然を活用したレクリエーション等を行った。

成果：本活動では、小学生未満の幼児から中学生をはじめとした幅広い年齢層の子供を対象に、自然を活用したレクリエーションを実施した。年齢差のある参加者全員が楽しめるようなルール設定を検討する過程を通して、状況に応じて工夫する力や創意工夫力を身につけることができた。また、地域の方々と協力して行ったカレー作りでは、初対面かつ年代の大きく異なる方々との交流を経験した。これにより、相手に配慮しながら円滑に意思疎通を図るコミュニケーション能力を養うことができた。

対象演習：C

実施日：2025年8月21日(木)～2025年9月4日(木)

実施都市：ポートビラ（バヌアツ）、ブリスベン（オーストラリア）

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）バヌアツ支所・他

実施内容：バヌアツ共和国とオーストラリア・ブリスベンにて、それぞれ異なる観点から国際協力と都市政策に関する実践的な学びを得ることを目的とし、理論と実践の間に存在する乖離や、現地に即した支援の在り方についての認識を深めた。

成果：JICA バヌアツ支所にて、事業説明や協力隊事業の紹介を受け、さらに現地で活動する隊員の視察を通じて、スポーツや教育を含む草の根レベルの国際協力の実態

を理解した。また、バヌアツサッカー連盟への訪問を通じて、スポーツを通じた国づくりや人材育成、コミュニティ形成の在り方についても知見を得た。オーストラリアでは、都市再生の先行事例として知られるブリスベン・サウスバンク地区を視察対象とし、スポーツ施設や公共空間、レクリエーション施設の配置、市民の利用実態を観察し、日本の地方都市との比較を通じて、スポーツを基軸とした都市政策や健康都市づくりに関する考察を深めた。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年10月5日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム

実施内容：Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ビジターサポーターを主な対象者として開催したブースイベントである、「イタヤ細工でのタオル留め製作体験」の運営、また実行援助を行った。

成果：今回の活動を通して、「スポーツ観戦」を主目的とした来訪にとどまらず、地元ならではの文化や資源に触れる体験を組み合わせることで、スポーツを契機とした新たな来訪動機を創出できる可能性を見出すことができた。また、スポーツ単体の価値に依存するのではなく、地域固有の特性や他分野の資源と掛け合わせることで、地域活性化施策を多角的に検討、また追求する視点の重要性を理解することができた。これにより、スポーツを軸としたまちづくりの可能性について実践的な知見を得ることができた。

(9) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

FLP演習B

<テーマ>

社会安全の法政策

<授業の概要>

履修生の関心に沿って、ゼミ論文のテーマを見据えた個別報告を中心に進めた。文献の検索と読み込み、ロジックの点検や関連論点の確認など、論文執筆に必要な調査研究の手順を身に着けた。秋には、夏季休暇中にキックオフ・ミーティングがあった津山市との連携事業で発表を行った。

<活動内容>

1年間を通じてゼミ論文テーマを見据えた個別報告を進め、合わせて、後期には、昨年度にサマースクールでお世話になった津山市との連携事業で調査研究と成果発表を行った。

個別報告では、履修者のひとりが、1年間を通じて、こどもの成長・発達の支援をテーマにする調査研究を行い、もうひとりの履修者は、前期中には、ダイバーシティーとボーカロイドの双方について、後期には、ボーカロイドに絞って調査研究を行った。

こどもの成長・発達の支援については、少年非行の予防という観点からどのような対応が求められるか、とりわけ、学校教育がどのようなかかわりをもつのかという問いを立てて、関連の犯罪学を踏まえながら、米国で実施されている非行予防プログラムを調べた。非行予防プログラムが効果実証がされていることを確認したうえで、関連の知見として、学校が少年にとってのマイクロ・システムであるという発達心理学に目を向けた。具体的なプログラムとしては米国の MST (マルチ・システムック・セラピー) を調べた。少年非行に関連する要因を知る手掛かりとして少年非行を行った少年の発達と成育環境を描く著書に触れた。

もうひとりの履修者は、当初は関心のひとつであったダイバーシティーに関連し、特に性的マイノリティを取り上げ、ネット上などで見聞きできる言説を分析する論文などを読んでいたが、その後、もうひとつの関心であったボーカロイドを中心に調査研究を進めることとなった。ボーカロイドについては、所属学部でのゼミでは社会情報の観点から調査研究を進めるとともに、FLP では、法学 (著作権など) または哲学 (エージェンシー論など) からの考察が可能であることを確認した。

津山市との連携事業では、下記のキックオフ・ミーティング後に調査研究を進め、11月18日(火)に「若者や女性に選ばれる都市の実現」と題する発表を行った。ロールモデルの不足という市の問題意識に応え、ロールモデルの育成のツールの開発導入とロールモデルの発信手法の開拓という提言を行った。活発な質疑と併せ、津山市から講評があった。

期末成果報告会では、ゼミにA生の履修がなく、サマースクールへの参加がなかったために、B生とC生の活動が報告された。B生は津山市との連携事業の概要紹介を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2025年7月16日(水)

実施場所：オンライン

実施内容：津山市との連携事業「キックオフ・ミーティング」。津山市みらいビジョン戦略室から津山市の取り組みの紹介と、連携事業の調査研究に求められることの説明があった。

成果：ゼミの関心領域を提示し、調査研究を進めるうえで問い合わせる部課室(子育て推進課)とのマッチングにつながった。

FLP演習C

<テーマ>

社会安全の法政策

<授業の概要>

ゼミ論文執筆に向け、調査研究を進め、原稿の読み合わせを行い、推敲を重ねて論文を仕上げた。テーマは「高齢者犯罪対策における高齢者支援のあり方」と、「障害の有無を問わない広い利用を期した共用品の普及」であった。

<活動内容>

4 年次に仕上げるゼミ論文の完成に向け、個別報告を進めた。ひとりの履修者は、早い年次から取り組んできた、高齢者犯罪をテーマに、『高齢者犯罪の総合的研究』を読み進め、日本における主要な先行研究を跡づけた。調査研究では、日本政府が進める再犯防止推進計画のうち、行刑を含む刑事司法の出口支援と入口支援という整理に着目し、入口支援のあり方として犯罪学というダイヴァージョンの概念と、その具体的手法として RJ (Restorative Justice、修復的司法) の可能性を考察した。加えて、社会学上の概念である社会資本が高齢者の孤立孤独に与える影響を扱う論考をヒントに、『高齢者犯罪の総合的研究』でも言及のある高齢者の孤立孤独が入口戦略、出口戦略にとって有する含意を検討した。

もうひとりの履修者は当初、ユニバーサルアクセスがキーワードとなる施設・設備のバリアフリーの調査研究を進めたが、その後、社会的包摂という点で共通する、共用品をテーマとすることとなった。関連する概念を整理し共用品が社会的包摂のひとつに位置づけられることを確認し、共用品の開発や普及についての沿革と現状を調べた。商学部でのマーケティングの学びを振り返り、マーケティングのどのような概念が共用品の普及につながるのかを考察した。マーケティング論 CSR にまでさかのぼって捉え、CSR がエイジェンシー・モデルやステイクホルダー・モデルとは異なる、社会課題の解決を視野に入れたときに、どのようなマーケティング論が導かれるのか、消費者にどのような選択が期待されるのかに考察を及ぼした。

期末成果報告会では、ゼミに A 生の履修がなく、サマースクールへの参加がなかったために、B 生と C 生の活動が報告された。C 生はそれぞれのゼミ論文の概要紹介を行った。

(10) 佐藤 信行 (法務研究科・教授)、工藤 潤 (法学部・特任教授)

F L P 演習 A

＜テーマ＞

「大学は社会のために何ができるか」を考える

＜授業の概要＞

本演習は、「大学」という仕組みの本質を深く理解し、「大学は社会のために何ができるか」を多角的な視点から考察することを目的としている。

大学の本来の役割は研究教育を通じた社会貢献にあるが、人口減少、気候変動、グローバル化、AI の発展等といった現代の急激な環境変化の中で、大学の重要性和社会からの期待はより一層高まっている。

そこで本演習では、大学の歴史や世界的な広がり、日本における法制度を学ぶ。その上で、大学と社会の連携・貢献に関する調査・分析を行い、最終的に大学が社会や地域課題の解決にどう取り組むべきかの提言へと繋げる。参加学生は、大学の構成員、大学そのものを研究対象とする者、そして将来の公務員や企業人として大学をパートナーに活用する実務家という三つの視座を併せ持つことが求められる。

本演習は、佐藤信行教授と工藤潤特任教授の共同指導の下、社会制度としての大学の可能性を多角的に探求し、地域社会の維持発展に向けた貢献策を主体的に模索していくものである。

＜活動内容＞

本演習は、春学期前半では、高等研究教育機関の歴史と世界的な広まり、日本における大学を巡る法と制度等について理解を深めた。具体的には、佐藤教授より、日本国憲法と教育を受ける権利、日本国憲法と学問の自由、教育に関する法体系等について講義を行い、工藤特任教授より、大学における学問の自由と大学の自治論の沿革、我が国の高等教育の現状と課題、大学の質保証システムについて講義を行った。

春学期後半では、2025 年 8 月 18 日(月)～19 日(火)に実施した「掛川市サマースクール(掛川調査)」に向けて、各学生が自ら設定した研究テーマについて、問題意識、研究の方向性と方法論等の発表を行うとともに、調査での訪問先及び質問事項を検討し、準備を進めた。

秋学期は、掛川調査でのヒアリング結果を整理するとともに、期末報告会に向けて発表資料を作成した。期末報告会後は、調査報告書の作成に向けて討議を行い、「掛川市未来共創プロジェクト～若者とつくる地域の可能性～」(掛川調査報告書)を完成させた。

また、1 年間の演習において、4 人のゲストスピーカーを招いて、講義と意見交換を行った。具体的な内容は以下のとおりである。

- (1) テーマ：米国の大学教育の現状と課題

実施日：2025 年 6 月 13 日(金)

講 師：グレン・ニューマン先生 (イリノイ大学法科大学院 客員教授)

- (2) テーマ：大学の社会的役割を考えるー釧路地域の現状ー

実施日：2025 年 7 月 11 日(金)

講 師：太田 泰晶 氏 (釧路公立大学 事務局長)

宮下 徹 先生 (釧路公立大学 特任教授)

池田 仁 氏 (釧路公立大学 経営企画課課長)

- (3) テーマ：中央大学全体の進路・就職状況(特に、土木系における公務人材(国・地方)及び AI データサイエンス系人材の養成・輩出の現状)

実施日：2025 年 11 月 21 日(金)

講 師：五十嵐 星汝 氏 (中央大学 キャリアセンター理工キャリア支援課課長)

- (4) テーマ：中央大学理工学部における学生の就職意識について―教員の視点から―
実施日：2026年1月9日(金)
講師：檜山 和男 先生（中央大学 副学長、理工学部 教授）

<掛川市実態調査>

対象演習：A

実施日：2025年8月18日(月)～19日(火)

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市役所、島田掛川信用金庫、静岡県立掛川工業高等学校

実施内容：主な調査内容は以下のとおりである。

2025年8月18日(月)

- 掛川市役所健康福祉部地域包括ケア推進課（10:00～11:00）
 - * 東京女子医科大学看護学部の地域枠推薦制度の導入背景、制度の内容、成果
 - * 本制度の地域医療への影響、等
- 掛川市役所人事課（13:00～14:00）
 - * 職員採用・育成における現状と課題
 - * 職員採用・育成における大学に期待される役割
- 掛川市役所デジタル戦略係（14:30～15:30）
 - * DXの取り組み状況、他の自治体との差異化
 - * 地元高校との連携状況・効果・課題
- 掛川市役所産業観光課（16:00～17:00）
 - * 中小企業における人材確保の基本的考え方とその実態
 - * 人材養成機関である大学に対する企業側や掛川市の要望

2025年8月19日(火)

- 島田掛川信用金庫（10:00～11:00）
 - * 島田掛川信用金庫における人材確保と育成
 - * 地元企業の活性化及び掛川市経済発展のための支援のあり方
 - * 中小企業のDX導入に関する支援とその成果
- 静岡県立掛川工業高等学校（13:00～14:00）
 - * 高校の現状と地域社会との関係
 - * 大学への期待
 - * 高大連携の可能性

成果：本掛川調査では、「大学は社会のために何ができるか」という視点から、複数の政策提言を行うことができた。具体的には、①東京女子医科大学看護学部への地域推薦枠制度・修学資金制度の充実策、②次世代の人材育成と地域活性化を同時に目指す掛川市役所・島田掛川信用金庫・地元の高等学校・大学の4機関による新たなパートナーシップ「地域共創型連携モデル」の構築、③SNS（Instagram）を活用した「若年層の市の認知度向上」「人材確保」「行政DX促進」などである。また、今回の掛川調査にあたり、ゼミ生がその準備段階（訪問先の決定、質問事項の策定と訪問先への事前送付、スケジュールの策定等）から、掛川調査後の期末報告会の準備と発表、及び掛川調査報告書の作成に至るまで、主体性を持って取り組んでいたことは、最大の成果であった。